

五七日

いつなぬか

焚焼仙経帰楽邦——正信偈に述べられているこの一行は、宗祖・親鸞聖人が本師とあおがれた曇鸞大師のエピソードが有名です。大師はもともと仙人の修行をしていました。なんでも樹の上に坐っていたといひます。その下を、インドから經典の翻訳のために中国に渡ってきた菩提流支三蔵が通りかかり「何をしているのか」と問いかけてました。「ご覧のとおり仙術を行っている。この術が完成したら二百年、生きることができただぞ」。それは、どうだ驚いたか、という口調でしたが、三蔵はすこしも驚かず「では二

帰楽邦

百一年目はどうなっている？」と問いかえしたのです。一瞬、行者は絶句し、樹の上から転がり落ちました。そうです。たとい二百年という驚異的な長寿を得ても、人はかならず死ぬのです。その当然すぎるほど当然の道理を指摘されて、行者は目がさめました。楽邦（お浄土）に帰すとは、たといこの肉体はほろびても、永遠のいのちに生かされる弥陀如来のおはたらきにすべてをおまかせすることです。

曇鸞大師はいまからおよそ千五百年もまえの古い中国の高僧です。六十七歳で世寿をまっとうされました。が、その教は宗祖を通して、千五百年後のこんにちまで生きつづけています。

